

# AUTHOR'S TALK

## ファッションに秘められた謎を解く

### 中野香織

## モードの方程式



新潮社 ¥1365



Kaori Nakano

1962年生まれ。服飾史家・コラムニスト。東大大学院総合文化研究科博士課程単位取得。ケンブリッジ大学客員研究員などを務める。著書に「スーツの神話」(文春新書)。訳書も数多い。

アリゾナには手術で取り出した自分の胆石をルーブタイにしている老人がいる。明治の初めに来目した英国皇太子は、彫り師を訪ねタトゥを入れてもらった。「ソフィステイケーション」とは、もともと「混ぜ物をする」という意味である……。

こんな驚きのエピソードが満載されているのは、服飾史家・コラムニストである中野香織さんの新刊『モードの方程式』。日本経済新聞にて現在も続く好評連載をまとめたものだ。

「毎回のコラムを執筆するにあたっては、徹底的に資料を調べつくしました。おかげで、原稿料の8割から9割が書籍代に消えてしまいましたけど(笑)」

ファッションとジェンターの関係、流行のキーワードに隠された意味、定番ファッションの意外なルーツなど、話題の広がりには縦横無尽。しかし本書は、単に事実を網羅した雑学本ではない。むしろ、深い教養をもとに練り上げられるウィットに富んだ考察こそが、本書の魅力の真骨頂といえるだろう。

「ここに取められている文章の初出は01年から02年にかけてなっていますが、その頃、一般の読者の頭にはまだクエスチョンマークが浮かんでいいた話でも、単行本になったちよと今、しつくり来ている感じがしますね。当時デザイナーが提案していたものが、3、4年をかけて裾野まで流通したというか」

そう語る中野さんだが、そもそも専門はイギリス文化史。伊達男の祖となるポー・ブランドを研究した修士論文にも現在の活動へのつながりが見受けられるが、本格的に服飾史の方向へと舵を切ったターニングポイントには、客員研究員として滞在していたケンブリッジ大学の体験にある。

「ケンブリッジ大学の総合図書館には、『ジェントルマン』というテーマだけで1フロアほど埋めつくすほどの本がある。それまで日本人が誰も手につけ

ていなかったジャンルだったもので、初めてその書棚を見た時、これは掘り甲斐のあるすごい鉱脈だと思えましたね。このテーマは歴史、社会、文学、そしてファッションと、どんな分野にだって広がる無限の可能性があるわけです」

ジェントルマンとファッションとの関わり、その一種でもあるタンデイズムを入口として、中野さんは服飾という未知の世界を探求し始めることになる。

「ただ、学問の世界では、ファッションについて語ることを見下す根強い風潮がある。浮薄なファッションは、論理的な研究には値しない——今ではすいぶんそんな偏見も薄らいできましたが、時折、そういう空気を感ずることがありますね」

本書が与えてくれる知的興奮は、そういったアカデミズムの閉塞感からは隔たったところにある。そして同時に、ファッションを語る文章につきまといがちなる鼻につくスノビズムが皆無

だという点も、中野さんの文章を好ましいものにしてている。

「私は基本的に、お洒落になりなさいという指南をするつもりは全然ないんです。ファッションというのは教養として押さえておくべきものですけど、それに振り回されて右往左往するのは情けない。ファッションに対してはコンプレックスなど抱かずに、突き放した笑える視点を持たせようがよいと思いますよ」

最後に、中野さん自身のファッションポリシーというところ。

「ありません。人に不快感を与えなければいい。あれこれ考えたって大して変わり映えしないし(笑)。お店に行っても、『そこにかかっているの上から下まで！』って買っちゃう。おじさんと同じですよ(笑)」

新しいファッション誌の創刊が相次ぐ昨今は、これまで以上に情報洪水への警戒が必要となるだろう。『モードの方程式』は、そんな時代の知的武装にはマストの1冊といえそうだ。

### 中野香織さんが語る、自分の指針となってくれた3冊

#### 「広告画像の伝説」

荒俣宏著 平凡社ライブラリー ¥1050



#### 見慣れた商標から物語を読み込む力

花王のお月さま、森永製菓のエンゼル、グリコのスポーツマン……。日本の著名企業が創案した商標の裏に潜む伝説と創意を追う画像学の大胆な試みである。「こういう画像の見方があるのかと、驚かされました。見慣れているからこそ見逃してしまうような商標に、ここまでの物語を読み込む。その目の付け方と執念、そしてそれをエンタテインメントとして仕上げる腕力には感服します」

#### 「情念戦争」

荒俣宏著 集英社インターナショナル ¥2940



#### ナポレオンの時代を情念で読み直す大著

フランス革命からワーテルローの戦いに至る「怒濤の30年」を、ナポレオン、タレーラン、フーシェという3人の情念戦争として読み直す歴史小説。「フラットな叙述ではなく、いつの世も変わらない人間の情念に引き付けて歴史を読ませる。歴史に対する私の視点がガラリと変わりました。私にとって、荒俣さんと鹿島さんは、二つの高峰のような存在。勝手に師と仰いでいます」

#### 「美女と野球」

リリー・フランキー著 河出書房新社 ¥1365



#### 下世話なのに読後感はずいぶん上品なエッセイ

ヒゲの女、普通のSEXアカデミー賞、コントの国の人……。目次を抜き出すだけで読みたくてしょう、甘酸っぱくも男気ある全45編を取めたエッセイ集。「行き詰まりを感じた時には、とにかくリリーさんを読みます(笑)。徹底的にアナーキーな文章に力が抜けて、思わず笑顔になりますね。発想も内容もほんとは下世話なだけで、残ったわずみにはなぜか品のよさがある」